

## 編集後記

藍野大学紀要第33巻が完成しましたので、お届けいたします。今号では8論文（論説2編、報告4編、資料2編）と中央研究施設第4回シンポジウム抄録（誌上発表）を掲載することができました。前号の編集後記でも新型コロナウイルス感染に触れましたが、1年たった現在でも、依然として感染が続いており、変異株がどんどん増えている状況です。マスク姿が日常となっており、1年半が過ぎようとしています。日本人はマスクに抵抗がない上、こまめに手洗いを実行するヒトが多く、その行為が他の国と比べて感染リスクを低減している最大のポイントではないかと思えます。感染者数は増減を繰り返していますが、感染者総数は他の国に比べて明らかに低い（人口の0.6%で欧米の10分の1）のが実際です。久しぶりに会う知り合いとの最初の挨拶の言葉が「ワクチン打ちましたか」になりました。新型コロナウイルスに対するワクチンが驚異的なスピードで開発され、世界中で接種が進んでいます。これは、SARSやMERSの感染拡大に対応して、未知のウイルス感染という新たな脅威に速やかに対応できる技術開発のため国家レベルで支援が進んだ結果です。今回開発されたワクチンは、これまでにないmRNAワクチンです。接種されたmRNAが細胞内に取り込まれて、効率良く細胞内のシステムを利用してタンパク質合成が起こること、その細胞で合成されたタンパク質が細胞外へ放出されて、免疫システムが活性化され、抗体ができるという原理に基づいています。mRNAは不安定な物質ですが、今回開発されたワクチンで95%の有効性が示されたことは、ワクチンが安定的に接種され、先に述べたすべてのステップが驚異的に上手くいっていることを示しています。2021年は新型コロナウイルスの大規模感染とともにワクチンという名の遺伝子治療が世界的な規模で行われた年として、東京オリンピック開催とともに永久に記憶されることになるでしょう。現在、当大学においても職域接種が近畿圏の中でも先陣を切って進んでいます。mRNA医薬の極めて高い有効性を世界的な規模で示すことができたことで、医薬品開発が新たな時代に入ってきたことを実感します。今後、あらゆる病気に関わるタンパク質を対象としたmRNA医薬が開発されることが予想されます。その使用に対する壁も急激に低くなりました。この素晴らしい技術は高価な抗体医薬の分野を一新していくと考えられます。まずは、感染症とがん免疫の領域が大きく伸展していくことでしょう。

変わりゆく時代の中で、医療従事者として活躍できる人材を育むこの大学にとって、藍野大学紀要は大学のアクティビティを示す重要なツールであり続けます。今後も皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

最後になりましたが、著者の皆様のみならず、お忙しい中、査読の労を執っていただいた査読者の先生方に感謝申し上げます。また、編集段階から事務を担当していただいた方々に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（藍野大学紀要編集副委員長：栗原秀剛）

### 藍野大学紀要 第33巻

令和3年8月31日

編集兼発行者 学校法人 藍野大学 藍野大学  
〒567-0012  
大阪府茨木市東太田4-5-4  
電話 (072) 627-1711(代)

印刷 明文舎印刷株式会社  
〒601-8316  
京都市南区吉祥院池ノ内町10  
電話 (075) 681-2741